



一橋大学  
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

一橋大学における  
「社会から見た大学教育」に関する  
自己点検・評価報告書

(概要)

一橋大学

2019年2月



## Executive Summary

本報告書は、一橋大学における教育に対する社会からの評価を把握することを目的として行った調査の結果をまとめたものである。調査においては、5つの専門分野について、専門と汎用の2種類のコンピテンスの重要度と習得度の認識について、多様な年代の卒業生を対象としたオンラインでの回答によるアンケートを実施した。取りあげた専門分野は、本学の専門分野の中で一定の卒業生がいると見込まれる「ビジネス」「経済学」「法学」「国際関係」及び「歴史学」の5分野である。さらに、一橋大学における教育の成果を測る指標として、専門理解度（一橋大学における教育を通じた専門分野の理解・関心の深まり）、教育満足度（一橋大学で受けた教育に対する総合的満足度）及び就職関連度（一橋大学で学んだ専門分野と現在の職務との関連性）に関する質問も行った。調査実施期間は2018年4月13日から5月31日であり、有効回答者数は1,271人（ビジネス658人、経済学207人、法学216人、国際関係90人、歴史学100人）となった。本調査の主要な結果は以下の通りである。

### 【汎用コンピテンス】

#### (1) コンピテンスの重要度・習得度認識

汎用コンピテンスに関する分析は、すべての回答者に対して行った31項目のアンケートへの回答に基づいている。

重要であると卒業生の多くが認識しているコンピテンスとしては、「母語での意思疎通」、「計画立てと時間管理」、「理論的な意思決定」といった、多くの人が社会人として働く上で基本的な項目に関するものが挙げられる。他方、「第二言語での意思疎通」、「国際的な仕事」、「起業家精神とイニシアチブの発揮」といった、多くの人にとって職務遂行に共通して必要なものとは考えることができない項目に対しては、重要性を低く評価する傾向が認められる。

習得したと卒業生が認識しているコンピテンスとしては、「母語での意思疎通」、「論理的思考に基づいた行動」、「多様性の尊重」といった項目が挙げられ、「環境保護への深い関与」、「新しい考え方を生み出す」、「起業家精神とイニシアチブの発揮」といった項目については習得したとの認識が低い。

#### (2) コンピテンス認識と専門理解度・教育満足度・就職先関連度の関係

専門理解度については、「『社会への配慮』に関する重要度」、「『知的作業』に関する重要度及び習得度」が正の関係を有している。教育満足度に対しては、「『知的作業』に関する習得度」及び「『チームワーク』に関する習得度」の高さが、自らの大学での学びの満足度と正の関係を有している。さらに、就職先関連度では、「『知的作業』の重要度」及び「『国際的な仕事』に関する重要度」並びに「『社会への配慮』に関する習得度」及び「『チームワーク』に関する習得度」が、正の関係を示している。

回答者の属性との関係では、大学院生であること及び成績優秀者であることは、教育の成果に関する上記3つの指標のいずれに対しても正の関係を有している。他方、留学経験の有

無は、専門理解度・教育満足度・就職先関連度のいずれとも有意な影響を有していないことが認められる。

### 【専門コンピテンス：ビジネス】

ビジネス分野における専門コンピテンスに関する分析は、31 項目のアンケートへの回答に基づいている。有効回答者数は 658 人であり、そのうち約半数の 331 人が商学部卒業生の回答であり、残りの半数はその他 3 学部卒業生による回答（経済学部 129 人、法学部 30 人、社会学部 168 人）となっている。

#### (1) コンピテンスの重要度・習得度認識

ビジネス分野における専門コンピテンスに対しては、出身学部に関わらず、「専門的英文書籍・論文の正確な理解」、「社会調査の基本的手法をビジネス調査に応用」といった、より特定の機能を主眼に置いて必要となる職能タスクや分析手法について重要性を相対的に低く認識する卒業生が多い。それとは逆に非定型な「仕事の段取りを決めるスキルがある」とか「従来の問題に気づき、代替案を提案」などについては、多くの卒業生が重要性を高く認識する傾向にある。

また、習得度に関しては、出身学部に関わらず、相対的に非定型で応用科学的な課題解決能力について、重要度とは異なり、習得度は低いと認識している卒業生の多さが認められる。

#### (2) コンピテンス認識と専門理解度・教育満足度・就職先関連度の関係

「ビジネス分野」への回答者全体についていえば、一橋大学の教育成果を表す指標に対しては、重要度よりも習得度において有意な結果が認められる。具体的にいえば、「『基本知識・理論的考察能力』に関する習得度」が高いほどすべての指標に対して、「『統計的調査能力』に関する習得度」が高いほど専門的理解度に対して高く評価する傾向がみられる。他方、「『多面的英語力』に関する習得度」は、すべての指標に対して評価を低くすることが認められる。また、回答者の属性との関係では、成績優秀者はすべての指標に対して、留学経験者は教育満足度に対して高く評価する傾向にある。

商学部出身者においては、全体の傾向に加えて、「『基本的考察能力』の重要度」、「『ビジネス基礎知識・考察能力』の習得度」も、大学における教育の成果を高く評価する傾向にある。他方、「ビジネス分野」の質問に回答をした、経・法・社の 3 学部出身者においては、「『社会理解・課題解決能力』に関する重要度」が高いほど教育満足度と就職関連度を高く評価し、「『ビジネスリテラシー』に関する習得度」が高いほど専門理解度及び教育満足度を高く評価する傾向がある。

### 【専門コンピテンス：経済学】

経済学分野における専門コンピテンスの分析は、25 項目のアンケートへの回答に基づいている。有効回答者数は 207 人であり、そのほとんど（186 人）が経済学部出身者である。

### (1) コンピテンスの重要度・習得度認識

経済学分野における専門コンピテンスに対しては、「物事を論理的に筋道立てて（ロジックを構築して）考えることができる」ことを最も重要度の高いものとする卒業生が多く、「分析目的に応じて適切な統計データを収集し、記述統計や図表等を作成できる」こと、「経済の統計を用いたり、定量化したりすることで実態（エビデンス）に即して物事を考えて議論することが出来る」ことがそれに続いている。他方で、「スミス、マルクス、ケインズなどの経済学の古典を参照しつつ議論することができる」については重要度の認識が低くなっている。

習得度については、「物事を論理的に筋道立てて（ロジックを構築して）考えることができる」ことについては、重要度の認識は高かったが、習得度の観点からは必ずしも高くない点が指摘できる。また、「社会や経済に関係する近年の事象や動向を的確に理解し、わかりやすく説明できる」ことについても、重要度よりも習得度の方が低くなっている。さらに、「経済学の規範としての公平や効率の概念を正しく理解して説明できる」や「経済学に関する専門的な書籍の内容を正確に理解することができる」については習得度の方が重要度より高くなっている。

### (2) コンピテンス認識と専門理解度・教育満足度・就職先関連度の関係

専門理解度に対しては、「『経済統計』に関する重要度」と『経済理論』に関する重要度及び習得度を高く認識している者が、高い専門理解につながっている可能性が示されている。他方、「社会や経済の近年の事象や動向に関する理解と説明」といった『社会』に関する重要度については、それを高く評価するほど専門理解度が低くなる傾向が示されている。

教育満足度では、「『経済統計』に関する重要度」と『社会』に関する重要度」とについて、それらの認識の高さと教育満足度の高さに正の関係が認められる。他方、「『英語能力』に関する重要度」を高く認識する卒業生は、教育満足度が相対的に低いことも示されている。

就職関連度については、「『経済統計』に関する重要度」と『経済理論』に関する重要度を高く認識している者が、専門と職務との関係を強く感じていることが理解される。他方、『批判的視点』に関する習得度の認識と、専門分野と職務との関係の強さについては、負の関係が認められる。

## 【専門コンピテンス：法学】

法学分野における専門コンピテンスの分析は、実定法及び基礎法の分野を対象とした知識を問う知識系コンピテンスに関わる 22 項目と法の領域における実践的な技能を問う技能系コンピテンスに関わる 8 項目の合計 30 項目のアンケートへの回答に基づいている。有効回答者数は 216 人であり、そのほとんど（199 人）が法学部出身者である。

### (1) コンピテンスの重要度・習得度認識

法学部門における専門コンピテンスについては、「契約自由とその例外」及び「複数の問題の矛盾なき同時解決」の 2 つについて、多くの人々が一致して重要であると認識している傾向が読み取れる。また、習得度については、知識系コンピテンスの習得度が高く、技能系コ

ンピテンスが相対的に低いことが認められる。特に、「憲法と法律の関係」は、誰もが良く習得したと認識している知識であることが理解される。

重要度と習得度には正の相関が認められる。両者を比べると、重要度が習得度より低いのは、全30項目のうち8項目のみであり、全般的傾向としては、重要度の方が高く認識されていると考えられる。特に、中等教育で学ぶもの、比較法・法制史の領域に含まれるもの、法学生や法曹には必要でもビジネスパーソンにはさほど必要とは考えられないものについて、その傾向が強い。

## (2) コンピテンス認識と専門理解度・教育満足度・就職先関連度の関係

専門理解度については、それと正の関係を有するコンピテンス項目は見出されない一方で、『刑事法・家族法』に関する重要度は負の関係を有している。教育満足度に対しては、『実定法一般・法実務』に関する重要度、『問題解決』に関する習得度及び『刑法』に関する習得度が、正の関係を有している。他方、『法実務・商法・労働法』に関する習得度は負の関係を示している。さらに、就職先関連度では、『実定法一般・法実務』に関する重要度、『基礎法』に関する習得度及び『民法』に関する習得度が、正の関係を有している。

教育満足度については、近年の卒業生の方が高い満足度を示していることが理解される。他方、就職先関連度についてみると、近年の卒業生は、大学での学びと職務の関連性を感じていない傾向がみとれる。また、大学院生、成績優秀者や留学経験者についても同様である。

### 【専門コンピテンス：国際関係】

国際関係分野における専門コンピテンスの分析は、30項目のアンケートへの回答に基づいている。有効回答者数は90人であるが、うち半数超の52人が社会学部卒業生、36人が法学部卒業生となっており、回答者はほぼこの2学部卒業生で占められている。

## (1) コンピテンスの重要度・習得度認識

国際関係分野における専門コンピテンスの重要度については、「文化的多様性の理解と尊重に基づく対話」、「外国人と議論、交流、国際感覚を身につける」こと及び「話題の国際問題についての史的／構造的背景をふまえた理解」といった項目を重要とした回答が多く、他者理解を基本にした国際感覚の涵養と、国際問題を大局的な枠組みから構造的にとらえる視点の獲得が重要であると考えられていることが理解される。習得度については、「文化的多様性の理解と尊重に基づく対話」が最も高く、「国際関係の事象を広域の枠組みから構造的に理解」、「日本語の新聞・雑誌の記事を批判的に議論」といった項目が続く。その一方で、「国際法の特徴および国内法との関係の理解・説明」、「国際関係／法に関する日本語専門書の正確な理解」といった点は、重要度・習得度のいずれも低くなっている。とりわけ国際法に関するコンピテンスについては、回答者の出身学部が法学部・社会学部の2学部にわたっており、過半数が社会学部出身であることを考慮した解釈が必要であろう。

## (2) コンピテンス認識と専門理解度・教育満足度・就職先関連度の関係

専門理解度については、『分析力・方法』に関する重要度』及び『語学・発信』に関する習得度』との間に正の関係が認められる。他方、『受信・発信』に関する重要度』の認識は、専門理解度との間に負の関係が存在することが示されている。教育満足度に対しては、『語学・発信』に関する習得度』が正の結果を示している。さらに、就職先関連度については、正の関係を示すコンピテンスは認められない。

大学院生は、学部生に比べて、専門理解度と教育満足度が高いことが認められる。就職先関連度に対しては、民間企業に就職している場合に、大学での学びと職務との関係を認識する程度が低いことが示されている。また、成績が相対的に優秀なものが、教育満足度を高くは評価していない傾向が認められる。

### 【専門コンピテンス：歴史学】

歴史学分野における専門コンピテンスの分析は、30 項目のアンケートへの回答に基づいている。有効回答者数は 100 人であり、ほぼすべて (95 人) が社会学部卒業生である。

## (1) コンピテンスの重要度・習得度認識

歴史学分野における専門コンピテンスについては、「歴史的考察に必要な情報の収集」に関して、その重要度・習得度の両面において高く認識されている。他方、「歴史学における言語論的転回の理解」については、重要度・習得度のいずれも認識の程度は低い。また、「信頼できる情報の取捨選択」及び「歴史的事象の見解の違いの文脈をふまえた理解」については、重要度は高く認識されているが、習得度は必ずしも高くない。さらに、「母語資料の文字おこしや外国語資料の翻訳・文字おこし」については習得度がかなり低いと認識されている。

習得度と重要度の関係については、全般的な傾向としては、重要度が習得度をおおむね上回っていることが理解できる。ただ、その差はさほど大きくはなく、コンピテンスを習得したとの実感が比較的あり、かつ仕事をするうえでの専門コンピテンスの不足感も少ないと考えてよいだろう。

## (2) コンピテンス認識と専門理解度・教育満足度・就職先関連度の関係

専門理解度については、『研究対象理解力』に関する習得度』が正の関係を示している。教育満足度では、『学知発信力』に関する習得度』との間に正の関係が認められ、歴史的知見の発信ができることが教育に対する満足度と深く関わっていることが理解できる。さらに、就職関連度に関しては、『学知活用力』に関する重要度』と『歴史的構成力』に関する習得度』との間に正の関係がみられることが認められる。

回答者の属性との関係では、大学院生は学部生に比べて専門理解度と就職関連度を高く評価していること、相対的な成績優秀者は自身の学びと職務との関係を強く感じていることが理解できる。